きらり
KIRARI

クラウス・アナセンさん

登別デンマーク協会は、文化交流事業として、毎年デンマークから研修生を招き、市民との交流などを通じて、登別とデンマークの親睦を深めています。

今年の研修生は、クラウス・アナセンさん。市民との交流や日本文化の体験が楽しみと言うクラウスさんに、日本や登別の印象などを聞きました。

ほかの国では感じられない優しさが伝わってきます

Klaus Riborg Andersen　1962年12月生まれ。38歳
デンマーク・オーデンセ市出身。教員養成学校を経て、26歳で教職に就く。現在は、リンゲ・フリースクールで教べんをとっている。妻と２人の子どもとリンゲ市に居住。

空港から一歩足を踏み出すと、その国が見えて来ます。日本はとても豊かな国

旅行が好きなクラウスさん。これまで、アフリカのタンザニアとチュニジア、アジアではトルコ、ヨーロッパでは、ノルウェー、ドイツ、イタリアなど、数多くの国々を旅してきました。

そんな、クラウスさんの目に日本はどのように映ったのでしょうか。

「どこの国を訪ねても、空港は、皆同じように立派。でも、空港から一歩足を踏み出すとその国が見えてきます。がらりと景色が変わり、周りに何もなく、道路さえも整備されていない国もあります。日本では、ビルが建ち並び、ほかの国では見られないほど真新しい自動車がたくさん走っている。街には至る所に広告が見られる。経済的にとても豊かな国と感じました」とクラウスさんは、日本の第一印象を話してくれました。

登別を訪れ、これまで抱いていた日本のイメージが変わりました

訪れた国やまちを知るにはホームステイが一番と言うクラウスさん。現在、市内にホームステイし、学校訪問や各種市民サークルなどと交流しながら、日本の文化や教育制度などを学んでいます。

▲市内の小学校で、児童と交流するクラウスさん

「登別市民のみなさんは、私に興味を持ち、そしてとても気を使ってくれます。ほかの国では感じられない優しさが伝わってきますね。見学した小・中学校の授業では、教師と生徒の隔たりがなく、子どもたちは楽しそうに学んでいる。教育システムはヨーロッパとあまり変わらないと感じました。正直なところ、日本人は感情を表さない、堅く形式ばった人たちというイメージを持っていました。登別に来て、これまで抱いていた日本のイメージが変わりました」とクラウスさんは、登別市民や教育についての印象などを笑顔で話してくれました。

クラウスさんの研修期間は8月21日まで。登別市民との交流や登別の恵まれた自然とのふれあいを楽しみにしています。